

## BOOK REVIEW

はげ山の研究

千葉 徳爾 著      そしえて

京都の寺町には、毎年秋になると、ふだんは漬物を売っている店がマツタケしか扱わなくなる「マツタケ屋さん」が現れます。店の前を通るたびにほのかに漂ってくる香りは季節を感じさせ、また何ともいえぬ京都らしさを感じさせてくれます。

このマツタケは、京都近辺や丹波の山々から集められたもので、この地方の山の幸の豊かさの象徴だともいえるでしょう。

さて、マツタケといえば、それが逆に自然破壊の象徴と見做された時期もありました。明治中期に本多静六の主唱した「赤松亡国論」は、日本の林地が崩壊しつつあることはアカマツ林の増加から立証でき、アカマツ林はやがて砂漠と化して国を亡ぼすだろう、と唱えました。さらに進んで1940年代の宮崎榊の理論では、アカマツ林地の乾燥化はアカマツの外性菌根、すなわち主にはマツタケの発達によっておこるとされており、ここまでくると「赤松亡国論」は「マツタケ亡国論」になったわけで、先程の山の幸の豊かさと真っ向から対立するものになってきます。

著者はこの「マツタケ亡国論」に生態学、地理学的な見地から疑問を呈し、そこからはげ山型景観のできる原因が、林地に及ぼす人為の影響によらずには解釈できないことを立証してゆきます。はげ山はその山の地質や地域の気候といった自然科学的条件の如何にかかわらず、落葉かきや根株の掘り取りといった人為的な活動なしで発生するものではなく、そこにはその地域の社会的、経済的な構造が反映している、というのです。瀬戸内や美濃など西日本の各地で、また朝鮮や中国でも、はげ山と天井川の見られるところには林地資源の過度の掠奪がみられ、交換という近世型の農業経営に圧迫された零細な農民が、入会地の樹を根こそぎ掘り取って、夜なべのための明かりに使う姿がその背後にみられるのです。

ある地域の景観を、その社会の価値観が歴史的に反映されてできたものだとするれば、この本を風景にとって美とは何か、という見方から読んでみることはできないでしょうか。著者のいう地域の社会的、経済的構造には、当たり前のこととして美学的な構造も含まれるのではないのでしょうか。

「よく日本民族は自然を愛するという人があるが、私のはげ山研究を通じて痛感したのは、この説がいかにも実情を知らない人の言葉であるかということであった。自然を保護したり破壊したりするのは民族性などという神秘的なものによるのではなくて、広い意味での文化的諸条件にささえられて生まれる現象である。」という著者の言葉は、ある意味では「民族性などという神秘的なもの」とらわれざるをえない立場にある私たちにむけて、先鋭な疑問をつきつけているといえるでしょう。

そして、保護にも破壊にも行き着くことのできない「園芸の方法論」は、逆に「文化的諸条件」を規定していくだけの大きな可能性も担っているといえないでしょうか。